
ゼロの輝き

遼明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの輝き

【Nコード】

N9609W

【作者名】

遼明

【あらすじ】

さまざまな世界を我が物にするため、ある人物は神以上の力を手に入れ異世界を生み出した。神だけではその人物を止めることは不可能となっていた。そこで神はその人物の野望を打ち砕くため一人の男を「天空の勇者」の称号と力を与え、その異世界に転生させる。今、戦いが始まる……

この作品は初めての投稿となります。ゆっくり話を進めるつもり

ですが頑張りますのでアドバイス、感想などよろしくお願いします
!!

プロローグ

俺は、不思議な場所にいた。
草原が辺り一面に広がり空には雲一つなく、暖かい日差しが眠気を誘った。

ここは何処だろう？死後の世界かな？体も若返ってるし・・・個人的には死んだら三途の川を渡るものだと思っていた。それにしてもここは殺風景だな。まあいい、いい天気だし寝るとしよう。

俺が寝始めて五分ぐらいたった時、俺の傍に誰かがやってきた・・・

「あなたが、^{イライトシニア}岩井俊秀さんですね？」

俺に声をかけてきたのは、長い黒髪で顔には仮面を付け、大きな白い翼が生えた人だった。

「はい、そうです。あなたは？」

「私は神・・・セレスティナとお呼び下さい。」

「神様ですか・・・セレスティナさん、俺に何か用ですか？」

「はい、俊秀さん単刀直入に言わせてもらいます。」

あなたには、とある世界に今すぐ転生してもらいたいのです。」

「別にいいですけど、何かあったんですか？」

「とある人物の野望により世界が崩れようとしています。」

俺は何か聞き間違いだと思ったがあえて突っ込まなかった。セレスティナは黙々と話を進める

「その人物は転生を繰り返し絶大なる力を手に入れました。その力は私達を超えるほどになってしまいました。その後その人物は異世

界を作り出し存在する全ての世界をものにしようとしているのです。

「スケールがでかい話だな。何故俺が転生に選ばれたんだ？俺なんかより強いやつなんていっぱいいるだろ」

「俊秀さん、惚けても無駄ですよ。あなたの生前したことは知っているのですから。」

「ふーん・・・神に伊達じゃないって事か。」

俺は少し驚いた顔で言った。そして少し間を空けてつぶやくように言った

「やはり、神様に隠し事は出来ないってことか。」

「いえ、あなたの話はよく聞きましたから・・・。」

セレスティナは懐かしそうに言った。どうやら俺のことをべらべら話した奴がいるようだ。

「しかし、神の力を超えてしまったような奴に俺は勝てんのか？」

「私達が直接戦うよりも勝率は上がるでしょう・・・あまり言いたくないんですがここ天界も平和ボケでおそらくともに戦うこともままならないでしょう。」

「天界はまずい状況なんだ・・・。わかった今すぐ転生しよう始めてくれセレスティナさん。」

「わかりました。それでは俊秀さんこの力を受け取って下さい。」

セレスティナは何かの呪文を唱えると水を掬う様な形で右手を胸の位置まで持ってきた。呪文が唱え終わると右手には七色に光る球体が現れた。そして、七色に光る球体を俺の体にぶち込んだ。

「俊秀さん、この力を手に入れる事であなは天空の勇者の称号を

得る事になります。この称号であなた自身の転生の決定権とこの力の行使・譲与が認められました。」

「くっ……この力は何だ？」

よくはわからないが、体から力が漲って来る様だった。

「この力は長い間封印されていました。そのためすぐには全ての力は使えませんが注意して下さい」

俺はセレスティナの言葉に頷いた。

「それでは俊秀さん、今から転生を始めますが何かして欲しい事はありませんか」

「そうだな……できれば俺の名前と性別、それと前世の記憶を引き継ぎにしてくれ」

「わかりました。では転生を始めます……………」

セレスティナは何かの呪文を唱え始めると俺の周りに白い光が現れた。少しずつ光に包まれていく俺はゆっくりと意識が遠退くのであった。

「……俊秀負けないでね」

その時、セレスティナが言った言葉と仕草が俺の記憶のある人物にダブった。

「お前まさか……………」

俊秀が名前を言う前にセレスティナの前から白い光に包まれ消えていた。

プロローグ（後書き）

誤字があったら、報告お願いします。

第1話 俺、誕生！！

ここはとある部屋の一室・・・

幼稚園ぐらいの男の子だろうか、朝早くからパソコンをいじっている。そのパソコンの画面には、日記が書かれていた。

7月17日

今日俺は4歳になった。そして、前世の全て記憶を思い出した。なぜ最初から記憶がなかったのは、天界では手違いがあつて記憶が引継ぎが遅れたと思っっている。

しかし、今思えば俺が3歳から字が読めるようになったのはその辺りから前世の記憶を徐々に思い出していた事となる。

前世で使っていた特殊な技は今では使えない様だが・・・・・・。最近気付いた事なんだが身体能力の高さは異常だった。

俺が「天空の勇者」の力が影響しているのではないかと思っている。しかし、「天空の勇者」の力とは一体どんな力なのだろう？まったく想像がつかない。

ここで文章が終わっていた。

(・・・・こんな日記書いてる場合じゃないな)

俺はすぐに書いていた日記を削除した。こんなもの今の親に見られたらすぐさま病院行きが確定してしまうような気がした。それだけは絶対に避けなくてはならない。

そんなことを考えていると廊下をどたどた走ってくる音がした。そして、勢い良く俺のいた部屋のドアが開けられる。

「お兄ちゃん、おはよう！朝ご飯だよっ！調べ物はそこでお終いっ

「！」

「ああ、おはよう。すぐ行くよ彩葉^{あやは}」

俺は彩葉とリビングに向かった。リビングには母さんが朝ごはんを食べようと座っていた。

「とし君、あやちゃん、早く食べましょ」

「うん、母さん……あれ父さんは？」

「今日、父さんはお兄ちゃんよりも早起きして仕事に行ったよ」

「えっ！？と言う事は彩葉も俺より早く起きたのか？」

俺は思わず大きな声を出してしまう。

「うん、今日こそはお兄ちゃんのトレーニングに最後まで着いて行くよ」

「む？言う様になったな？いつも朝は寝ていたくせに今日だけなんじゃないのか？」

俺は笑い飛ばすように彩葉に言った。すると彩葉は悔しいのか言い返す。

「うー。これからもしっかり起きるもん！ー」

「そうか、なら俺も楽しみだ！」

「あやちゃん、早く食べないととし君は食べ終わって行ってしまுவよ」

「えっ！？お兄ちゃん早い！？」

そう俺は彩葉がごちゃごちゃしている間にすばやく朝ご飯を食べていた。

「ご馳走様でした。母さん6時半までには帰ってくるようにするよ」
「えっ！？待ってお兄ちゃん！！もごもご・・・ひっへひまふはー
はん」

彩葉は朝ご飯を口の中に一気に入れ口の中に入れながら喋った。

「・・・彩葉待ってやるから、行儀良く食え！！」

俺の後を追おうとする彩葉を止めた。すると俺の言葉を聴いて彩葉は申し訳そうに「ふあい」と一言言った。

「・・・喋る時は食い物は飲み込んでからな」

「・・・んぐ、はい」

彩葉も食べ終わったので朝のトレーニングを始めることになった。

「それじゃいくぞ！彩葉」

「うん、お兄ちゃん」

俺は玄関を出て彩葉と準備体操をしていると母さんが玄関から出てきて俺に話しかけてきた。

「とし君、今日は幼稚園あるからね。昨日みたいに7時回ったらだめだよ」

「うんわかった。彩葉準備体操は大丈夫だな？」

「うん大丈夫だよ。早くいこっ！！」

彩葉は走り出した。

「おっ・・・おいっ！！彩葉一人で行くна危ないぞ！！じゃ・・・じや俺も行ってくるよ母さん！！」

急いで俺は彩葉に追いつくため走り始めた。少し走ると彩葉が近所の人と話していたらしくすぐに追いつく事が出来た。

「おっと、あやちゃん。いとしのおにー様が来たぜ」

「えっ？本当だ」

「はっはっはっ・・・おはようございます藤林さん^{ふじばやし}」

「おうっ俊秀少年！！今日も出雲兄弟^{いずも}は元気だな」

藤林さんは笑顔で俺に挨拶してくる。

「はい！・・・藤林さん、今日は早いですね。仕事ですか」

「ああ、そうなんだよ少年、最近仕事が忙しくってよ。まったくいやな世の中だぜ」

「大変なんですね。大丈夫ですか？」

「少年よ、心配はいらねえよ。俺はこー見えて隊の中では1番強いんだぜ」

藤林さんが言った言葉に彩葉は驚いた表情で言った。

「えっ？嘘！？」

「あやちゃんひどいなあー。まあその内、体術を教えてやるからな・
・・ってもうこんな時間か、じゃあまたな」

藤林さんは疾風の如く駆け出していった。

「彩葉、それじゃあ行こうか」

「うん、お兄ちゃん。・・・藤林さんって何の仕事しているのかな？」

「・・・そうだな」

疑問が残るが、俺は彩葉とともに走り始めた。

しばらく俺は無心で走っていると、苦しそくに彩葉が話しかけてきた。

「はっはっはっはっ・・・お兄ちゃんいつもこんなペースで走っているの？」

「ん？そうだが・・・しんどいのか？少しペースを落とそう」

「えっ！いいよお兄ちゃん私は大丈夫だから・・・」

「彩葉、人の合わせてトレーニングをすることは悪くないが、ここで倒れてもらっても困る」

ペースを落としながら、俺が言うと彩葉は申し訳なさそうに俯いている。

「それに、俺はビックリしているぞ！まさかここまでついて来るとは・・・」

その言葉を聴いて彩葉は食い付いて来た。

「えっ？ほんと？」

「ああ、本当だ。実はもう半分以上走っている」

俺の話を聞いて彩葉は、とっても嬉しそうな顔をした。その顔はとってもかわいく俺は思わず、

（彩葉は将来、嫌と言っほど男が寄ってくるだろうな）
てな事を考えていた。

その後、俺は彩葉といろいろと話ながら走り家に着き、今日ある幼稚園に行く準備を始めた。

「とし君、あやちゃん準備できた？」

「俺は準備できたよ」

「母さん、ちよつと待って・・・・・・・・うん、私も準備できた」

「それじゃあ行きましようか」

母さんは俺と彩葉を連れて幼稚園に向かうのであった。

第1話 俺、誕生！！（後書き）

誤字があったら、報告お願いします。

第2話 兄VS妹

「出雲兄い！！今日こそ捕まえてやる！！」

「はっ！！そんな簡単に捕まってたまるかよ！！」

俊秀は田中に言う。

彼は今、幼稚園内でケイドロ（もしくはドロケイ）をしている。今俊秀はドロボーでありサツから逃げているのだが、彼の身体能力はかなり高くなかなか捕まえられないのである。

「あっ！待て！！」

俊秀はサツの横をするりと抜けると捕まっている仲間を解放するために牢屋の場所まで一気に駆ける。

「出雲おおおおー！！！！！！！！早く俺達を解放してくれ！！！！！！」

捕まった仲間がふざけて叫んでいる。俊秀は笑いながら仲間を解放していく。

それを遠くから見ていたサツの司令塔こと山口が呟く。

「やはり出雲君を何とかしないといけない様だね」

「渡辺君、そろそろ彼女を出動要請を」

欠伸をしながら、山口の隣に立っていた渡辺が口を開く。

「いいぞ山口。許可は取っている」

山口と渡辺が話している間、俊秀は2人のサツ相手に逃げ続けた。

「ふー。何とか振り切ったか・・・」

俊秀は2人のサツから逃げ切り、隠れられる場所でゆっくりと腰を下ろす。空を仰ぎながら大きく深呼吸をする。少し休んでいると仲間の佐藤がやってきた。

「出雲無事か？」

「ああ、なんとかな。サツの動きは今どうなっている？」

「新たに助っ人を投入したらしぞ。残り時間も少ないからただの足掻きだと思うが・・・！！出雲、牢を見る！！」

「えっ！？・・・何！？どう言う事だ！？」

俊秀は驚いた。先ほど開放したはずの仲間達がもう捕まっているのだった。

「まずい、みんなを助けないと・・・」

「行くな！出雲！！助っ人が誰かわからない中、上策ではない」

「だが、ここにいてもいつ見つかるか分からんぞ？」

「あつ、お兄ちゃん見つけ！」

後ろから声がしたので振り返ってみると俊秀と佐藤の時が一瞬止まった。目の前にいる彼女はこそサツの助っ人の証、白い鉢巻きの付いた赤い帽子をかぶっていた。しかも彼女は二人がよく知る人物、俊秀の妹、彩葉だった。

「逃げんぞ！！佐藤！！！！」

「おうさ！！」

「あつ！待てー！ー！！」

俊秀と佐藤は別の方向に逃げたが、彩葉は迷わず俊秀の後を追った。

「お兄ちゃん、ここで無敗伝説終わらせて貰うよ！」

「なんじゃそりゃ！？」

俊秀は笑いながら突っ込んでいるが彩葉からなかなか逃げ切れずにいた。手を抜いている訳ではないが、俊秀の動きに彩葉がピッタリついて来るのだ。

（くっ・・・今日のランニングもだが、何故こんなについて来れる！？）

俊秀は少しだけ考えてしまった。そのせいで一瞬だけ隙を見せてしまう。

「えい！！」

「！？」

俊秀は辛うじて右に避け、そのまま走った。

「えっ！？・・・んつと逃がさないよ、お兄ちゃん！」

彩葉は大きく体制を崩した。が、すぐに立て直し俊秀を追う。

「・・・しつけーな」

俊秀はぼそつと呟いた。

そんな中、俊秀と彩葉の様子をサツの司令塔、山口とお供、渡辺は見ていた。

「いやー、予想以上だな。出雲妹の活躍は!!」

「渡辺君、予定通りですよ。そもそも出雲兄弟は似てないとは言え双子なんだから」

「へー、双子だったのか。でも双子だからと言って運動神経が同じとは思わんがな。あいつ何かしてたっけ？」

「彼女は影でトレーニングをしているよ」

「・・・まあそろそろ行こうぜ。もう時間がない」

そうだなと一言山口が言って2人は俊秀を捕まえるため彩葉の援護へ向かった。

「お兄ちゃん！もうあきらめなよ」

「彩葉、いい事を教えてやろう。あきらめない限り終わることはないんだよ」

「ふーん、いつまで持つのかな？」

俊秀と彩葉が戦っている(?)うちに気付かれない様に山口と渡辺が俊秀の背後に近づく、

しかし、俊秀は気付いていたようで山口と渡辺を彩葉を撒くのに利用したのだった。

「サンキュー。助かったぜ」

「あっ！退いて!!あ痛ッ!!!!」

「ゴフッ!!!!??」

「いつ・・・出雲君!!」

俊秀は3人をぎりぎりまで引き寄せて横に飛んだのだった。彩葉は俊秀を追うため全力で走っていたため山口と渡辺を避けることが出来なかった。逆に山口と渡辺はどっちかに行く事は読めたが、全力で突っ込んでくる彩葉は計算に入っておらず、彩葉を避けられなかった。

「うー。痛い」

「これは予想外・・・」

「・・・さすが出雲妹・・・破壊力抜群だぜ」

ちなみに彩葉と山口は尻餅、渡辺はかろうじて立っているがもろに彩葉の体当たりを食らったようだった。

「あー・・・山口、渡辺、彩葉すまん」

「出雲君、君が誤ることはない」

「そうだぜ？あれは不慮の事故だ。第一お前がどっちかに避けることはわかっていたからな。だが、挟んでんのに、突っ込んでくる奴があるか？なっ出雲妹」

「うー。ごめんなさい・・・」

「気にするな。別に俺はなんとも思っていないし」

笑いながら渡辺は言った。そしてチャイムが鳴る。

「あーまた、出雲君を捕まえられなかったかー」

「まあいいじゃん、次捕まえれば」

山口の言葉に笑いながら渡辺は答える。

「お兄ちゃん、そろそろ戻らないと先生に怒られるよ」
「ああ、そうだな。行こうぜ!!」

そして4人は歩き出した。

第2話 兄VS妹（後書き）

誤字があったら、報告お願いします。

第3話 公園に行こう

今日の幼稚園も終わり俺と彩葉は近所の公園に遊びに来ていた。いつも俺は彩葉の様子を見ながらトレーニングをしている訳だが、今日は彩葉も一緒にトレーニングをするのだった。

「彩葉、別に俺のトレーニングに付き合わなくてもいいんだぞ？」

俺は、腕立てをしながら彩葉に言う。

「私、朝、今日こそはお兄ちゃんのトレーニングに最後まで付いて行くよって言ったよ」

彩葉も、腕立てをしながら言う。

「そうだが……無理だけはするなよ」

「うん!!」

彩葉は元気良く返事する。しかしこの時、彩葉はまだ俺のトレーニングの真の怖さを知らなかったのだった。

1時間後……

「彩葉大丈夫か？」

「……………だ……………い……………じょーぶ」

彩葉は顔が真っ青だった。ちなみにトレーニング内容は腹筋背筋100回5セット、腕立て40回5セット、これを30分で終わらせ、残りの30分は公園一周1分切り4分のインターバルで6本した。このメニューは俺が前世の時、やっていた回数半分の半分をしている。最初は俺も制限時間以内にするのは難しかった。さらに言うところトレーニングを始めた当時、公園一周1分切りは俺が全力で走ってギリギリ切れるタイムだったので、かなりやばかった。

そんなメニューを影でトレーニングをしている彩葉とは言え、こんな普通の幼稚園児がやらない様なトレーニングを急にすれば、間違いなく体調を崩す。もちろん途中で彩葉を止めたが、彩葉は言うことを聞かずに最後までしたのでこのような事になっている。

俺は仕方がないので、首にかけていた財布の中身を見た。中には五百円玉が入っていたので近くにある自動販売機にスポーツ飲料を買いに行くことにした。

「彩葉少し、ここで待ってけよ」

彩葉は頷いたので、俺はスポーツ飲料を買いに行った。

俺は自動販売機がある場所に行く途中、砂場で群がっている子供に目移った。良く見ると一人の子供を囲って虐めている様に見えた。俺はその現場を見て見ぬ振りが出来ずにすぐ砂場の方向に向かった。近くまで行くと5人の男の子が寄って集って1人の女の子を虐めていた。

「お前等！！やめんかいつ！！」

俺は思いっきり怒鳴ると5人が見てきた。

「何だよお前、俺たちは遊んでんだよ、邪魔すんな!!」

「俺には遊んでいるようには見えないが?」

「お前がなんと言おうと関係のない話だ! 帰れ」

俺は思わず呆れてしまった。どうやらこの5人は虐めることが遊びと主張する悪ガキのようだった。体格を見るに年齢的には今の俺より上らしいが女の子の方は俺と同じ年に見えた。一体どういう経緯で虐められているのか気になったが、今の俺に必要なことは女の子の救出なので5人に立ち向かった。

「関係ないだと?・・・立ち会ったこの瞬間からもう関係はある

!! その女の子を開放させて貰おうか!!」

「うるせーな!! さっさとどっか行けよ!!」

5人の中の1人が殴り掛つて来た。俺は素早く右に避け左手の拳を腹部に入れた。もちろん手加減はしている。それでも相手を倒すことが出来た。そして腹部に入れられた男の子はゆっくりと立ち上がり、

「ごほごほ・・・こいつ・・・やりやがったな!!」

「もっ、ゆるさねえー!! いくぞ!!」

リーダーらしき人物が合図を出したとともに全員一気に俺に飛び掛る。俺は相手の動きを読むため素早く2、3歩下がりが構える。何も考えていなかったのか5人は俺の動きにダッシュで付いてきて、1人はそのまま体当たりをしようとしていた。体格的に悪くない戦法であるがそんな戦法で負ける俺ではない。俺は飛び掛ってきた1人をターゲットにし、先ほどと同じように腹部に拳を入れる。ただし今度の威力は立ち上がれない様にする為少し力を入れた。

「ふん！！1人目っ！！」

「ごぼ・・・！？」

「おい大丈夫か！？」

「くっ・・・クソチビめ・・・」

明らかに動揺がわかった為、俺は1人を沈めたら直にターゲットを次に移した。俺の動きに気付いた4人であつたが少し遅かった。一気に近付いた俺は1人右足で蹴り飛ばした後、近くにいたもう1人を左手で張り飛ばす。

「後、2人い！！」

「何だこいつ、強い！？」

「舐めていくと俺らもやられるぞ！！」

攻撃に転じてきた相手の動きを俺は直感で読み、右からの足払いと左からの拳を避ける。どうやらこの2人は少し戦い慣れている様だったが攻撃後の隙が大き過ぎるため俺は左足からの回し蹴りを2人にお見舞いした。この蹴りはクリーンヒットしたらしく2人は倒れた。

「りっ・・・リーダーがやられた！？くそ・・・覚えてやがれ！！」

「ふん！！もう虐めなんかすんな！！」

5人はお互いを支えあいながら撤収していった。

「ふっーーーー・・・君、大丈夫？」

俺は砂場に残った1人の女の子に話しかける。

「・・・うん」

女の子は頷きながら答えた。

「そうか・・・それは良かった。・・・君なんて名前なの」

「・・・私、クニサキシスケ国崎雫」

「へー国崎ね、俺は出雲俊秀！よろしくな！」

新たな会話に入ろうとしたが、俺は彩葉を待たしているのを思い出した。

「国崎！！俺の妹も紹介するからちよつと付いて来てくれないか？」

「・・・うん。俊秀君私のことは雫でいいよ」

「そうか！！じゃあ行こうか、雫！！」

俺と雫は彩葉のところに向かったのであった。余談だがスポーツ飲料を買い忘れたのに気付き、すぐ引き返すこととなるのだった。

第3話 公園に行こう（後書き）

誤字があったら、報告お願いします。感想もお待ちしております。
次回の投稿は未定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9609w/>

ゼロの輝き

2011年10月23日16時02分発行